

障害者が地域の防災訓練 に参加する試み

「グループホームに入居する方が
地域での支援をおこなう」

笛吹市社会福祉協議会 事務局次長

兼支援センターふえふき 所長

主任相談支援専門員 鈴木勝利

(認定社会福祉士・精神保健福祉士

介護福祉士、介護支援専門員

ピアサポーター)



R6 笛吹市自立支援協議会

笛吹市社会福祉協議会
第4次地域福祉活動計画の基本理念

「こんなまちであつたらいいな 安心して暮らせる幸せあふれるまちづくり」

地域共生社会の実現化



地域共生社会とは

制度・分野ごとの『縦割り』や「支え手」

「受け手」という関係を超えて、

地域住民や地域の多様な主体が参画し、人と人、人と資源が世代や分野を超えてつながること、住民一人ひとりの暮らしと生きがい、地域とともに創っていく社会を指しています。

(厚生労働省ポータルサイト)

笛吹市社会福祉協議会での障害福祉部門 支援センターふえふきの紹介

- 地域活動支援センターⅠ型・Ⅲ型2箇所
- 相談支援事業(笛吹市委託相談・計画相談)
- コミュニケーション支援事業
- 一宮障害福祉サービス事業所(就労B型、生活介護)
- 障害者生活支援事業

その他・・・(一部)

障害者社会参加事業 (笛吹市の委託事業)

精神障害者地域移行支援事業(県委託事業)

発達障害者支援強化プロジェクト(県委託事業)

障がい者が地域の防災訓練に参加する試み 平成24年から

①いざという時の助け合い・支えあいのできる地域作り



近隣との顔の見える関係ができる事で、何かあってもお互い助け合える地域。

②共生の地域作り



どんな障がいを持っていても、地域で安心して過ごせる地域

東日本大震災をきっかけに、障がいの方々が安心して地域共生社会を具体的に進めるために、笛吹市では社協をはじめ、様々な機関と連携し地域作りを行ってきた



地域の防災のシステムに障がいの方々がなかなか入れない、入っていない現状があった

避難誘導、特性に応じた避難所生活、適切な情報供与が不十分と言う課題もあった

【東日本大震災から学んだこと】

①まずは自分の身は自分でまもる。そして自助から共助へ

②地域の人々の支えあい

避難をしてからも・・・

東日本大震災では、精神障がいの方々が避難所に行けず、閉じこもりになっていたり、自閉症の子供を抱えて車で避難生活をしていたり、障がいの特性に応じた支援が難しい現実があった。



共同作業による地域づくりを目指すためには、誰もが安心して暮らせる環境づくりが重要
障がい特性のために、どうしても地域行事に参加しない、または出来ていない方が多い現状を踏まえ、双方向から見た「安心出来る地域づくり」を提案してきた

いざとなったら自分も助けて欲しい(障がい当事者)



この地域で災害での死者を出したくない(地域住民)

出来そうでなかなか接近しない相互ニーズの統合を目指して

災害は、当日だけの事ではない。その後も被災は続いていく



地区防災訓練に参加しました

まずはお互いを理解することが大事。「知らない」ことが偏見や差別を生む



25年 石和において聴覚障がいのご夫婦が参加。



26年 八代において高齢の母と知的障がいの娘さんが参加。



27年 境川において身体障がいの方が参加



28年 石和において小さな子どもたちだけの時に地震が起きたら。

この他、視覚、難病、うつ病、知的のきょうだいなど、様々な障害種別や生活感の違いを持った方への理解と協力を進めていき、全地区を回った。



- ・富士北麓の自立支援協議会にて発表
- ・県社協の防災フォーラムにて発表
- ・石和地区での説明会
- ・節目で地域啓発研修で発表





障害者避難サポート

○…笛吹市石和町唐柏地区では、車いすを利用する障害者が1人で自宅にいたところ震度6弱の地震に見舞われたとの想定で訓練が行われた。

地震の発生を受けて近くに住む数人が

高野大さん(22)宅に駆け付け、安否を確認。「忘れ物はないか」と声を掛け、常備薬などを持って交代で車いすを押しながら避難所となっている公民館へ向かった＝写真。避難する際にはブロック塀やブドウ棚の支柱など倒壊の危険性がある構造物の場所を確認した。〈中嶋寿美子〉

地震、豪雨へ備え点検



令和1年 春日居において精神の親子での参加

ホームレスに近い生活をしていた親子。緊急時の判断能力が乏しいところがあり、当人たちよりも周囲の方々が心配していた。

特に地域住民さんの苦手意識があるのは、普段から付き合いのない精神・発達・知的障害の方々である。

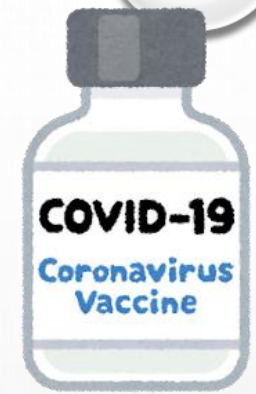
平成30年 石和において高次脳機能障害の方の参加

笛吹市役所防災課、笛吹社協地域福祉課、笛吹市自立支援協議会、笛吹市住民などと協同し、地域に住む障がい者も地域住民と一緒に地域防災訓練へ参加し、住民の方々の協力の元に指定避難場所まで避難する訓練を企画実施、毎年様々な地区で、その地区に住む障がい者等を住民の力で避難する訓練システムを提供。強い拒否反応をする地域や、それ以前の課題を訴える地域もあったが、結果、旧町村単位で毎年実施していた。

- ・その際の撮影した動画を用いて未実施の地域で上映研修を行い、避難訓練に参加する障がい者のみならず、多くの住民と研修会を各地で開催。・県社協や他の市町村の研修会でも講義や上演依頼を受ける。
- ・マスコミや広報誌にも協力を戴く。



ところが・・・



コロナの影響を受け、各地での自主防災訓練が
中止になっていった・・・

何かのイベントをするにしても、最小限の規模
と人数で行うこと、という縛りもあった



「みんなで考え、参加する」ということから、
今出来ることだけ、出来る範囲がテーマになってしまった

(地域共生のまちづくり考える笛吹市社協の取組み)

● 支援センターと地域福祉課など皆で一緒に考えたこと

目 的 「支え手」「受け手」と分断しない、支え合いの
関係づくりの大切さに気づく

イメージ 災害時のボランティア活動に関わり、被災し
困っている人を有志(災害ボランティア)と
一緒に支援することを実践

「コロナで出来ない、なんて言わない」

「縦割りじゃなく、一緒に考えて一緒に汗かこう！」



(地域共生のまちづくり考える笛吹市社協の取組み)

災害ボランティアセンターの訓練と一緒に参加

内容 「県主催の防災訓練・災害ボランティアセンター設置運営訓練」

参加 災害ボランティアグループ・支援センターふえふきの当事者2名に声掛け(精神、高次脳の男女)・社協職員で参加

経過 ①災害ボランティア・支援センターふえふきの仲間との共有

②個別に趣旨や役割の確認

③主催者等の調整

④当日参加

⑤ふりかえり

⑥行政・JC等新たなメンバーで構成する「関係者打合せ会」に参画

※現在、中途半端な状態・・・

(地域共生のまちづくり考える笛吹市社協の取組み)



「災害ボランティア活動とは？」

災害時に、生活に支障がある
事象を支援、協力すること

「災害ボランティアセンターとは？」

災害時の困りごとを受付、市内外から
駆け付けるボランティアと必要な活動を
円滑に調整する拠点



2014年2月 笛吹市雪害ボランティアセンター

(地域共生のまちづくり考える笛吹市社協の取組み)

☆当日の災害ボランティア体験の様子は

**助けを求める現場とボランティアをつなぐ
マッチング担当（Aさん、Bさん）がサポート**



(地域共生のまちづくり考える笛吹市社協の取組み)

☆当日の災害ボランティア体験の様子は (精神障害のCさん)

**高校生ボランティアと一緒に、被災者でベッドが
必要な方のための段ボールベッドづくり**



(地域共生のまちづくり考える笛吹市社協の取組み)

☆当日の災害ボランティア体験の様子は (高次脳と片麻痺のDさん)

乳幼児の親子が避難生活する 福祉避難所運営の協力・お手伝い





Dさん: 障がいでも片手しか使えなくても、もっとできることがあったんじゃないかな。



Bさん: ボランティアを含め協働する方々がどの程度障がいへの理解があるのか、まずお互いを知ることが大事だと思う。



社協担当: 災害ボランティアセンター設置運営マニュアルは誰が見ても分かるようになっていること、行政と連携し検証していくことが必要。



ボランティアセンター担当: 笛吹市での防災訓練でも、障がいのある方にも協力してもらいながら取り組んでいきたい。障がいがある方にしかできないこともある。

○メリット

- ・自分はここに居ます、という発信。孤立を防ぐ。
- ・活動をするからこそ、周りから声を掛けられる。
- ・精神障害等、関わりが難しいと思われていたが、個人でのお付き合いならば問題は無いと思ってくれた。
- ・自分が困った時に助けてもらいやすくなる。
- ・システムに参加することで、保険や個別サポートが受けられる。

○難しいこと

- ・まだまだ障害者＝何も出来ない人のイメージが強い
- ・緊急時なので、その現場で判断することも多い
- ・長期化しやすい現場での対応 等

R5年度の出来事

- 地域の防災訓練が全て再開されてはならず、それまでの意識も無くなってしまった。
- 笛吹市に新たにグループホームが進出する
 - ⇒石和町川中島にらくてい笛吹さんがオープン
 - 支援センターふえふきで、第一号の入居者を依頼。（すぐ近くに住んでいた）
 - 管理者さんの地域展開の意識が高い
- 相模原障害者施設殺傷事件をテーマにした研修等で、より一層地域移行の意識が高まった
 - ⇒重度の方は施設しか行先が無い。（現実は？）
 - ⇒親が高齢になったら施設入居する、では遅い
 - ⇒グループホームで生活をする（できる）対象が広がった
 - ⇒グループホームは果たして施設なのか、地域での住居なのか

提案から実施のながれ

らくていさんに提案

- ・趣旨や過去の経緯を説明
- ・対象となる利用者へ説明
- ・市障害福祉課、防災課等に協力要請
- ・らくていさんにて、河川清掃に参加
- ・施設避難計画など作成
- ・一時避難場所の確認

石和地域と協働

- ・区長さんと面談
- ・区長さんが区の会議にて提案
- ・民生委員さんと面談
- ・区長さんと課題など話し合い
- ・区長・民生児童委員さんと協議
- ・川中島で独居の地活利用者も参加依頼

らくていさん見学

- ・らくていさん内を見学
- ・参加予定の入居さんと面談
- ・当日の流れ、役割分担確認

※台風接近のニュース
○台風で中止のアナウンス

Mさんです 社協ブログより





問題点

- 石和でありつつ、地域での高齢化が進んでいる（昼間は若い人不在）⇒対応が出来ない
- 障がい者は避難困難者であるという思い込み（現場でのイメージが付かない）
- 地域防災という意識が薄い（行政がやるべきだという思い）
- 地域での避難の役割分担の曖昧さ。一時避難所の在り方、福祉避難所の運営等
- グループホームは施設なのか、地域での住居なのか（避難計画書は作成）
- 地域へ押し付け感が強い

見えてきた課題



対応と提案

- だからこそ、若い人が必要になるのではないか。帰宅困難者も発生する可能性
- 障がい者＝重度の障がいのイメージが強い。出来ることをしていく啓発活動の必要性
- 防災意識の更なる改善。役割の意識改善
- 事業者間協議、自立支援協議会等での協議
- いざと言うときだけのお付き合いではなく、普段からのお付き合いと、出来ることの共有が必要

最後に…



- 地域の福祉力で、共に生きるまちをつくりませんか？
まずは、参加すること。
- 現在は地区防災が主となっている。いざと言うときは
地区の皆さん全員が被災者。普段から協力を
意識しましょう
- 社協は**地域共生社会の実現を目指します**